

境界線上の喜び — 宗教学研究室で学んだこと —

渡邊 直樹

「あのころの宗教学の研究室になんで急にそんなにたくさんの学生が、しかも妙な人たちが集まったんですか？」

宗教学研究室を卒業してから、しばしばたずねられる質問だ。

私が宗教学の研究室に在籍していたのは1974年の4月から76年の3月までの2年間。学んでいたなどとはおこがましく、ただ在籍し、ゼミと宴会には顔を出すものの、尺八演奏家になろうかと尺八部の活動のほうに熱心な学生時代だった。

だが、柳川啓一先生の「新宗教運動の調査研究」ゼミで、誰が何年生なのか、学部生が誰で院生が誰か、先輩後輩も判然としない宴会の熱気のなかで結ばれた絆はいまでも強いものがある。74年に宗教学の研究室に入った学生は16人だったと思うが、それ以前が数人だったのに比べ、異常といってもいいほどの人数の多さだった。

そのなかで今でも仕事も含めて顔をあわせるのは四方田犬彦、島田裕巳、久我英二（現・マガジンハウス）といったところ。学部、大学院の先輩の中原俊、中沢新一、植島啓司の諸兄とも飲んだり遊んだりさせてもらっている。

東大闘争の影響で1969年の入試が中止になり、71年に私が駒場に入ったときは政治の季節は終わりかけ、尺八部の部室にも「革尺同」（革命的尺八者同盟らしい）のピンク色のヘルメットが転がっていたり、タテカンが並びデモもあるものの、むしろ神秘的なものへの志向が静かにひろがりつつある、そんな時期だった。駒場では見田宗介先生の「コミュニケーションと最適社会」ゼミに入り、社会学に進むつもりでいた。ところが当時の社会学は人氣が高く、文科Ⅲ類から進学するには駒場での平

均点がかなり高くないとむずかしく、みごとはじかれてしまった。

駒場3年目のときに、たまたま柳川先生の「柳田國男と折口信夫」という講義を聞き、先生の熱気あふれるパフォーマンスに触れ、それに学部のうちにはユングからサド、バタイユ、エリアーデ、柳田國男まで「何をやってもよい」らしい宗教学科という、正体不明な学科にも魅力を感じるようになっていた。

柳川先生の「新宗教運動の調査研究」ゼミの特色は、従来の学者のように「調査研究対象」を外から「冷たく」観察・調査・研究するのではなく、“participatory observation”といい、調査という目的を明らかにせず、内部に入って、信者の人たちと自分を重ね合わせるようにしつつ研究するというものだった。「冷たい」観察に対し、対象に共感をいだきつつ観察する「熱い」方法であった。

実は、卒業後15年以上を経て私が週刊誌の『SPA!』の編集長になったときに、従来の週刊誌とは異なるニュースの選択、視点、文体を作っていくと試みる上で、「対象に共感を抱く」というこの方法論を参考にするところが大きかったのである。

同ゼミで私は四方田犬彦とともに当時、高橋信次氏がおこした「GLA」を対象に選んだ。研修会で信者さんと話をしたときも、日比谷公会堂で催された信者の集会で、壇上で「古代語」なるものを話す信者さん、それに向かい「あなたの前世は卑弥呼だった」「真光の悪い狐がとり憑いていた」などと言うパフォーマンスを見たときも、最初は違和感ばかりを覚え、気持ち悪く感じていた。しかし、信者さんたちと付き合う期間が長くなり、

話を聞き、表情の変化をみているうちに、この場所に参加することによって初めて救われる人が、少なからずいることは認めざるを得なくなってきた。共感するまではいかなくとも、自分の許容範囲が広がるというか、自分の中にも信者さんたちとさして変わらない弱いところがたくさんあることに改めて気づいてくる。かつて味わったことのない貴重な体験だった。

宗教学科の学生としては決して熱心なほうではなかったが、卒業後、出版に携わるようになってから、宗教学研究室の人たちや本や空気に触れていたことが私の中でいつしか醸成して、書籍や雑誌の企画という形で生まれたように思える。

卒業後に入社した平凡社の『太陽』編集部では作家の遠藤周作氏や水上勉、深沢七郎、五味康祐氏などと、仏像、禅、俳句、寺社、占いなどの特集をつくった。

『SPA!』では、先にも少しふれたが、事件であれ、人物であれ、商品であれ、この雑誌でとりあげるものは全て、自分や編集部員が共感をもてるものにする、他人事なら取り上げないという編集方針をつくった。そのスタンスが明確になったのが、「連続幼女殺人事件」の犯人・宮崎勤をとりあげたときだ。テレビ、新聞、週刊誌がほとんど、「宮崎＝おたく＝わけのわからない不気味なもの」として扱った中で『SPA!』は、おたく性を自分たち自身の中にも見出し、そのうえでこの事件をどう扱うか「大塚英志 vs. 中森明夫」対談で語ってもらった。共感を根底に置くことにより、おのずと文体も無責任で書きっぱなしというわけにはいなくなる。人間を見る眼差しも、新聞の社会的ではなく「文学的」な視点になる。白・黒をつけるのではなくグレーのグラデーションのなかに位置付けるようになる。

89年には、中沢新一氏との対談という形でオウム真理教の麻原彰晃教主本人の肉声をマスコミでは初めて掲載することになった。後に、この時点ですでに坂本弁護士一家は殺害されていたことが判明するが、この対談に先立ち中沢氏が「坂本弁護士事件にあなたは関与していないんですね。もし関与しているならこの対談は成立しませんので」と確認したところ、麻原教主は「私はまった

く知りません」と答えていた。

麻原のオウム真理教を含め、龍泉、円応教、善隣会、おうかんみち、天道総天壇など20の教団、霊能者を連載で取り上げ、フォトジャーナリストの藤田庄市氏に「人はいかに救われるか？」にアプローチしてもらった。これは『霊能の秘儀』という書籍にまとまったが、後書きは井上順孝氏に書いていただいた。

従来、宗教をマスコミが取り上げるときは、その本質には興味を示さず、社会的スキャンダルがおきたときにバッシングするか、逆に教団への「ちょうちん記事」か、のどちらかがほとんどだった。そうではない「真つ当な」宗教記事を掲載したいという思いから様々なアプローチを試みた。

バッシングかヨイショ。これは他の対象に対しても、マスコミが安易に行いがちなステロタイプな記事の書き方である。在日朝鮮人に関する記事も同様であった。

『SPA!』では四方田大彦と彼の友人で在日コリアンの李鳳宇（映画プロデューサー）と何度も話し合い、1年間の準備をして「在日コリアン新世代パワー」という、それ以前にはなかった視点で特集を組み、朝日新聞、産経新聞の両新聞から高く評価された。天安門事件が起こり、ベルリンの壁が崩壊し、ソ連が解体する時代だった。

何を書いてもよいといわれていた学部の卒業論文に「空飛ぶ夢」をテーマに、いくつかの文献からの寄せ集めでなんとか枚数をクリアした私は、ノンフィクションライターでエホバの証人の輸血拒否事件を題材とした『説得』で講談社ノンフィクション賞をとっていた大泉実成氏から、マレー半島に住む夢をコントロールするといわれるセノイ族の取材をしたいという企画を提案されて、即座にOKした。私自身が行きたいくらいであった。セノイに魅せられた大泉氏はその後、漫画家の水木しげる氏もセノイに同行することになる。そのルポは『夢を操る——マレー・セノイ族に会いに行く』（講談社文庫）にまとめられた。

夢と現実、狂気と正気、日常と非日常、生と死、男と女…その境界線上に佇み、見つめ、時には踊ってみせる、そんな喜びを、どうやら宗教学研究室の空気の中から私はマスターしてしまったような

のだ。

そうそう、冒頭の質問に関してはもっばらこう答えることにしている。「そのころの宗教学研究

室にいた人間の共通点はね」ここで一呼吸いれ、「みんなヘンタイだということです」と。すると、皆さんなるほどと納得してくれるのである。